

招請講演

精神医学の先達・国際人向笠広次

鈴木 二郎

山王精神医学心理学研究所 鈴泉クリニック

日本人として二人目の国際ロータリークラブ会長であった向笠広次のロータリアンとしての偉大さは、多く語られ描かれている。しかし彼の先駆的な精神医学者、臨床家としての側面は、わが国の精神医学界にさえ、ことに若い精神医学徒には、ごく一部にしか知られていない。筆者は、日本における蘭学の大きい流れをなす豊前中津の医学史の探究に情熱を燃やす、本学会川罵真人会長の求めに応じ、国際人向笠広次の精神医学におけるさわめてオリジナルな貢献に関して、若干の報告をしたい。

向笠広次は、明治四四年（一九一〇）十一月九日、久留米で長男として生まれた。父君が、同地の連隊の一等軍医勤務の頃で、続いて小倉、京城（現ソウル）、水戸、福島と父君の転勤に応じて、転居している。福島で馬跳び遊び中に脾骨骨折し、一年間休学した。その故もあり、東京神田の私立東京中学校に入学した。四年修了で山形高校を受験、合格した。本人は気乗りしなかったが、中学の先生の勧めで入学し、ホームシックにかかったが、柔道に熱中したり、山形の自然風物に魅せられて、後にその先生に非常に感謝している。

高校卒業後、東京帝大を受験合格するが、胸部レントゲンに異常を発見され、二年休養を命じられ、二年浪人した。

その後九州帝大を受験し、合格するが、やはり胸膜炎で一年休学している。この間英語の学習に熱心で、山形高校時代に独語に熱中したことと相俟って、のちの国際的活躍につながったと思われる。健康回復後ヨットの魅力に惹かれ、ヨット部を創設、全国大会等で優勝している。

さらにこのヨット生活の中で、喜代子夫人と学生結婚をしている。

昭和一三年九大卒業後、母校の精神病学教室（下田光造教授）に入局したが、またもや肺結核の疑いで六ヶ月入院している。昭和一八年大分県別府朝見病院に勤務時代、徴兵で小倉陸軍病院（現国立小倉病院）に勤務した。昭和二〇年敗戦とともに、再び朝見病院に復帰したが、時折同県中津市平田医院にアルバイトをしていた。

九大精神医学教室在局中、安河内五郎との共同開発「電気痙攣療法」（昭和一四年）、黒岩勝美との共著「精神分裂病夫婦ノ一家系、（中略）綜説的考察」（昭和一五年）、「躁鬱病の病前性格について」（昭和一六年）等の研究を行っており、昭和二一年九月に「精神病の遺伝生物学的研究」に対し、学位が授与されている。さらにこの後、令弟向笠寛氏（元中津市医師会長）とともに研究を行い、その成果は、「Cyanamide (H₂NCN) の生体アルコール反応に及ぼす影響ならびに治療的応用」（昭和三七年）に結実している。

「電気痙攣療法」の研究と臨床応用は、イタリアの Cerletti, U. & Bini, L. と同年に発表されており、当時乏しい精神分裂病治療にまさに世界的先駆をなしたといえることができる。現在も修正電気けいれん療法としてうつ病治療に用いられている。初期に開発作成した器具が一台アメリカ精神医学会のニューヨーク記念館に保存されているという。

Cyanamide (シアナマイド) は、嫌酒剤としてこれまた治療の困難なアルコール依存症の治療に数少ない有効な薬物として用いられている。

昭和二二年四月、平田医院の一部で精神科を開業、翌年中津市殿町にベッド数二〇床の向笠精神科医院を開業した。喜代子夫人は、独学で看護婦免許を取得し、二人で昼夜を分かたず、診療に従事した。同時に九大、久留米大学非常

勤講師も勤めている。

一方、昭和三二年中津ロータリークラブに入会し、同三七年には、第一〇代中津ロータリークラブ会長に就任した。同四二年七月第三七〇地区ガバナーに就任しており、同五二年七月国際ロータリーアジア地区諮問委員、ついで翌年七月国際ロータリー理事に就任した。

昭和五七年ついにダラスの国際大会で国際ロータリー会長に任命された。「人類はひとつ、世界中に友情の橋をかけよう」、「周囲の友人たちと心から握手を交わしましょう、マイ・カズン」と呼びかけ会場が熱気に溢れ、マイ・カズンの連呼の輪が広がったと伝えられている。

翌年以降リウマチに悩まされ川寫院長の治療を受けながら、診療や、ロータリー活動に勤めた。昭和六〇年一二月全国ロータリアンからの寄金で、中津市船場町に向笠記念公園が完成した。

平成四年四月大腿骨頸部骨折で入院加療中、一〇月五日胃潰瘍出血により、永眠した。喜代子夫人は、今も中津市で存命である。